

母性看護学実習における看護学生の ライフコースに影響を与えた学び

Learning affects the life courses of nursing students
in a maternal nursing practicum

藤井智恵美 和田 佳子 川尻舞衣子 岸田 泰子
Chiemi Fujii Keiko Wada Maiko Kawajiri Yasuko Kishida

キーワード：母性看護学実習、看護学生、ライフコース

key words: maternity nursing practicum, nursing students, life course

要 旨

母性看護学実習が青年期にある看護学生のライフコースに影響を与えることは予測されるが、実際に看護学生がライフコースへの影響についてどのように考えているかとの検討はなされていない。そこで、母性看護学実習が自身のライフコースに影響を与えたと答えた看護学生の自由記述の結果を元に、その学びについて検討した。80名の自由記述の分析を行ったところ、【家族の存在を意識したライフコースへの願望】、【出産や育児というライフイベントに対する意識の具体化】、【母親役割、女性役割への気づき】、【職業選択への影響】、【両親への感謝】、【かけがえのない生命についての学び】という6つのカテゴリーが抽出された。看護学生は母性看護学実習を通して、過去から未来へと続く、非常に長いライフコースの軌跡を描くという学びをしていた。

Abstract

Maternal nursing practicums are believed to affect the life courses of nursing students in their adolescence. However, the perceptions of nursing students regarding the actual impact on their life courses have not been considered.

Therefore, we investigated their acquired knowledge, based on an open-ended questionnaire survey of 80 nursing students who responded that their own life course was influenced by the maternal nursing practicum. Six categories were extracted: desire for a life course rewarded by the presence of a family, increased awareness of life events (childbirth and childcare), awareness of maternal and female roles, effects on career choices, gratitude for their own parents, and learning about the irreplaceability of life. Nursing students gain knowledge from a very long life course trajectory from the past to the future through the maternal nursing practicum.

受付日：2014年10月30日

受理日：2015年1月21日

共立女子大学 看護学部 母性看護学

I 緒言

母性看護学を学ぶ看護学生の多くは、人の発達段階においては青年期にあり、青年期は心身両面から結婚や子育てにも関心が高まる時期である¹⁾といわれている。また看護学生にとって母性看護学実習は、妊婦・産婦・褥婦に対する看護を学ぶとともに、生命への畏敬や感動、母親となる喜びなど実感し、新生児を積極的・肯定的に受け入れるように変容し、自分自身の母性に気づき見つめるという学習の機会²⁾となっている。母性看護学実習の特色として、周産期における新しい家族の誕生の中でケアを展開することにより、学生の母性意識^{3), 4)}や、子どもに対する感情⁵⁾に影響を与えることが明らかにされているが、実習体験により、学生自身が家族観を再認識することは、学生の将来のライフコースに影響を与える可能性を秘めていることが考えられる。

看護学生のライフコースに関する先行研究では、一般女子大学生に比べ、結婚・出産後も就業継続の意思を持っている者が多く、仕事と育児の両立型および結婚後、出産を機にいったん退職し、子育て後復職することを希望している学生は6割～8割との報告⁶⁾がある。看護学生は看護師という有資格の職業に就くことから、職業意識が高いと考えられるが、この結果について清水ら⁶⁾は、看護学生が実習で接した妊産婦や看護職をモデルとして自分に置き換えながら将来のライフコースを思い描いているため、と考察している。

以上のような先行研究の結果からは、母性看護学実習が看護学生のライフコースに影響を与えることが推察されるが、実際に看護学生がライフコースへの影響についてどのように考えているかとの検討はなされていない。そこでわれわれは、看護学生が母性看護学実習の体験により自身のライフコースへの影響があったと考えているのか否か、また影響があるとすれば、どのような学びから学生たちはそのように考えているのかを明らかにしたいと考えた。これにより、看護学生が将来の人生設計を意識し、卒業後、看護師として活躍する際のワーク・ライフ・バランスを考える機会として、母性看護学実習の意義を見出せると考えられる。そこで本研究では、母性看護学実習にお

ける、看護学生のライフコースに影響を与えた学びを明らかにすることを目的とした。

II 用語の定義

本研究においては、井上⁷⁾の定義に従い、「ライフコース」を「ライフイベント」に伴って上昇(下降)する「ライフステージ」の一連の変化であり、「ライフイベント」の選択の結果描かれる、人生の軌跡と定義する。「ライフイベント」とは人生における出来事そのもの(経験)を点で示したものの、「ライフステージ」とは「ライフイベント」を契機とする任意の期間(線分)とする。

III 対象と方法

1. 対象

A看護短期大学看護学科3年生の女子学生114名であり、全員から参加協力の承諾が得られた。

2. 期間

2013年5月～12月であった。

3. 調査方法および調査内容

本調査は母性看護学実習における実習記録とリンクして分析することを前提とした、学生のライフコースに関する記名式の質問紙調査の一部を用いた。

手続きとして、すべての学生が全領域別実習を終了した後(2013年12月)、「母性看護学実習のまとめ」の時間として全学生が集合し、母性看護学実習についての話し合いの時間をもたせた。その一環として「自分のライフコースを考える」をテーマとして掲げ、学生は、(1)現在年齢を基軸として、過去および将来のエピソードやライフイベントを挙げ、自分のライフコースを自由なラインで描くという作業を行った。その上で、(2)「母性看護学実習はあなたのライフコースに影響を与えたか」の質問項目によりその程度をたずね⁸⁾、(3)その理由やエピソードについて自由記述で回答を求めた。

(1)の結果を概観したところ、参加協力が得られた学生の現在年齢の幅が大きく、これまでのライフイベントに結婚や出産経験のある学生がいた。年齢が高いほど、多くのライフイベントを経験していることや社会人経験のある学生はそうでない

学生に比べて、母性看護学実習における学びや指導内容が異なる⁹⁾ことから、ある程度、分析対象者の条件を限定したほうが現役看護学生の集団として代表的であると考えられた。したがって、記されたライフイベントの中に結婚・出産経験のある学生は除外し、青年期にある現在年齢24歳以下^{10), 11)}に分析対象者を絞ったところ、参加協力者114名中93名(81.6%)が該当した。

そして本研究では、そのうち(2)の「母性看護学実習はあなたのライフコースに影響を与えたか」の質問項目⁸⁾に対して「かなりそう思う」、「少しそう思う」と回答した、つまり、影響があったと自覚した、80名(84.9%)の記述を分析した。

なお、学生が母性看護学実習で体験した具体的な内容(体験項目、受け持ち事例)の詳細を知るために、学生の実習記録と照合することの承諾を得ることが必要と考え、本研究に際し、実習記録の一部を用いることへの承諾について学生から署名により同意を得た。したがって、本調査は記名された自記式質問紙調査である。

4. 分析方法

自由記述内容を素データとし、それらを研究メンバーで検討した。看護学生が母性看護学実習により自身のライフコースに影響を与えたと考える理由およびエピソードの記述を繰り返し読み、その中から、看護学生が母性看護学実習という体験

により得たライフコースに関する学びとして記載した文脈に注目してコード化を行い、意味内容の類似性に基づいて集約、分類してサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。結果の信頼性を確保するため、研究者間で討議した。

5. 倫理的配慮

調査に際し、口頭および文書により、研究の主旨を説明し、学生と同意書を交わした。その際、不参加の場合も不利益はなく、参加の有無が科目成績に影響しないこと、結果は個人が特定されない方法で取り扱い、研究以外には使用しないことを説明し、また研究過程においても個人が特定されないよう、質問紙調査票のデータを入力後は、ID化して扱うなど、特段の配慮を行ってプライバシー保護に努めた。なお、研究者の所属機関において研究倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号:KWU-IRBA#14056)。

IV 結果

該当する80名の自由記述の内容を分析した結果、看護学生が母性看護学実習という体験により得たライフコースに関する学びとして84コード、14サブカテゴリー、6カテゴリーが抽出された。表にその一覧を示した。以下に、得られたカテゴリーを【 】、サブカテゴリーを〔 〕、コードを『 』で示した。

表 看護学生が母性看護学実習により得たライフコースに影響を与えた学びのカテゴリー、サブカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
家族の存在を意識したライフコースへの願望	幸せそうな家族に接し、結婚や家族形成への願望を抱く 結婚・出産・養育をより現実的なものにとらえ、計画的にライフコースを描こうとする
出産や育児というライフイベントに対する意識の具体化	母児との出会いや児の誕生による感動から自らの出産・育児への意識を高める 受け持ち事例に影響され、仕事と育児を両立させたいと希望する ハイリスクケースから学び、リスクを回避した出産を希望する
母親役割、女性役割への気づき	育児は母親一人がするのでなく周囲の協力が必要だと気づく 母親の強さや産む性としての女性の強さに気づく
職業選択への影響	助産師を目指す 助産師には向かないと実感する 母子を対象とした職場を希望する
両親への感謝	自分を産んでくれた親へ感謝する ここまで育ててくれた親へ感謝する
かけがえのない生命についての学び	出産は奇跡であると学ぶ 生命の尊さを学ぶ

1) 【家族の存在を意識したライフコースへの願望】

『実習で分娩に立会い、幸せな家族を見て、結婚・出産は良いものだと感じた』などの記述に見られるように、学生は、〔幸せそうな家族に接し、結婚や家族形成への願望を抱(く)〕き、〔結婚・出産・養育をより現実的なものにとらえ、計画的にライフコースを描こうと(する)〕していた。学生は、受け持ち対象者が『結婚して家族となっていく様子を見て』、また『妊娠・出産自体が素敵に見えて』、『それらの体験を経て家族を築いていく場面に出会い』、『結婚し、家族をもちたい』という気持ちを強めていった。パートナーや子どもを得て、原家族とは異なる『新しい家族を形成するという(ライフコースへの)あこがれ』が記述されていた。

2) 【出産や育児というライフイベントに対する意識の具体化】

学生は母性看護学実習で、〔母児との出会いや児の誕生による感動から自らの出産・育児への意識を高め(る)〕ていた。そして、それだけでなく、実際に『有職の産婦に接し仕事に対する考え方や将来設計を聞き』、『夫や家族の協力、社会資源の有効活用などを知る機会が増え(た)』、『家庭と仕事の両立』と『働く職場環境についての具体的なキャリア』を考えていた。勤労婦人などの〔受け持ち事例に影響され、仕事と育児を両立させたいと希望する〕という具体的なライフコースを描くことにつながっていた。さらに、受け持ち事例からは社会的背景に加え、高齢出産や不妊治療後の妊娠など〔ハイリスクケースから学び、リスクを回避した出産を希望(する)〕し、『若いうちに出産したい』という希望を抱くなど、出産や育児に対する意識を具体化していた。

3) 【母親役割、女性役割への気づき】

入院中の『母親を取り巻く、面会に訪れる家族に出会い』、また『受け持ち事例から家族や職場環境での協力の話を聞く』などして、学生は〔育児は母親一人がするのでなく周囲の協力が必要だと気づ(く)〕いた。そうして、受け持ち事例が『徐々に母親役割が取れるようになっていくことを見る』という学習もしていた。また出産する女性、育児をする女性が〔母親の強さや産む性としての女性の強さ(に気づく)〕も持ち合わせて

いるということを目の当たりにし、『女性として、子どもを生める性に生まれたことを実感した』。自らも『産む性として、これからの人生について考えるきっかけを得(た)』ていた。

4) 【職業選択への影響】

看護学科に在籍する学生はすでに看護師の職業を選択していると考えられるが、『実習により、助産師を目指したいと考えるようになった』者があった。〔助産師を目指す〕という、その後の進学や、〔母子を対象とした職場を希望する〕という、将来働く『専門領域を見据えて志望する』という記述が得られた。一方で、『分娩を実際に見学し、その現象にショックを受け〕て〔助産師には向かないと実感する〕者もあった。

5) 【両親への感謝】

『子どもを生むことが大変と感じた』ことにより、学生は〔自分を産んでくれた親へ感謝(する)〕し、受け持ち事例の母親が子育てしている姿を見て、〔ここまで育ててくれた親へ感謝する〕気持ちを抱くなど、『大切に育ててくれたことに対する両親への感謝』が記述されていた。

6) 【かけがえのない生命についての学び】

子どもが生まれる場面に立会った学生は〔出産は奇跡である(と学ぶ)〕と感じ、実際に生まれた新生児に接して、〔生命の尊さを学(ぶ)〕んでいた。『生まれた児は、これからの世の中を背負う人であり』、未来へつながるかけがえのない生命であると感じていた。

V 考 察

1. 母性看護学実習から看護学生が得たライフコースに影響を与えた学び

母性看護学実習により8割以上の看護学生が自らのライフコースに影響を与えたと考えている⁸⁾が、本研究から、看護学生はライフコースに関して、受け持ち事例を通した多くの体験から学びを得ていることが明らかになった。

実際に、母性看護学実習で学生は、妊娠褥婦および新生児に出会い、家族が形成されていく様子や夫を含めた家族の幸せそうな顔や支えあう姿、授乳場面での児の様子や母親の幸せそうな様子を見て、家族の素晴らしさを認識し、家族を築きたいという気持ちを強め、【家族の存在を意識したライフコースへの願望】を抱いていった。

家族を形成する最初のライフイベントである結婚について、社会保障・人口問題研究所による未婚女性対象の「結婚という選択についての調査」(出生動向基本調査)¹²⁾では、いずれは結婚しようとする未婚の女性の割合は高い(89.4%)。この調査¹²⁾では、未婚女性たちの結婚することの具体的な利点として、「自分の子どもや家族を持てる」「精神的安らぎの場が得られる」「愛情を感じている人と暮らせる」などが上位に挙がっているが、この結果と同様に看護学生には、〔幸せそうな家族に接し、結婚や家族形成への願望を抱く〕、〔結婚・出産・養育をより現実的なものにとらえ、計画的にライフコースを描こうとする〕という希望があった。そしてそれらの願望は、モデルとなる妊産婦や家族に接することによって得られた体験に基づくものであった。

母性看護学実習は学生にとって、一組の親子を受け持つことにより1人の女性が我が子への思いを育みながら、出産・育児を通して母親へと成長する姿を目の当たりに出来る貴重な体験である¹³⁾。また徳田ら¹⁴⁾は、産婦や褥婦と話すことや関わること、母親と新生児との相互作用に関わることで、出産や子育てに対してはプラスの考えや家庭を築きたいなど、体験を通して母性観は深まり、意識の変化が起こると報告している。本調査においても学生は、母性看護学実習の体験により、【出産や育児というライフイベントに対する意識(の具体化)】を具体化させ、さらに母性意識・母性観を深めていったと考えられる。学生は受け持ち事例の妊娠・出産・育児を通じ、また日々の関わりで母親となっていく様子を見て、その女性が母親へと成長していくことを理解し、自分の未来像や母親像へ結びつけることで、自分のこととして興味・関心を持ち¹⁾、さらに、その体験を自分に置き換えてみて、将来への願望を広げ、ライフコースを描いていた。

出産は大変なことではあるが、学生は、〔母児との出会いや児の誕生による感動から自らの出産・育児への意識を高め(る)〕ていた。衣川¹⁵⁾によれば、学生は産むことの価値を実感し、素直に「母はすごい」と実感し、「自分も産んでみたい」という出産の体験を希求するという。本調査の結果からも同様に、学生は実習の体験から、〔母親の強さや産む性としての女性の強さに気づ

(く)〕き、自らの「産む性」・「育てる性」が発揮されることを意識していた。すなわち、学生は自己のライフコースに目を向け、将来の自己をイメージすることにつながっていた。これらが母性看護学実習による影響であると、学生は自覚し⁸⁾、本研究で得られたカテゴリーのように多くの学びを得ていた。学生は、実習目標の1つである、自己の母性について考えることができおり、健全な母性性を育成する場として母性看護学実習が機能していたわけである。

次に、学生は実習中に、産婦人科で働く助産師から実習指導を受ける場合が多い。また助産師の助産行為や、助産師が実施する妊婦、産婦、褥婦、新生児のケアを見学する場面も多々ある。調査内容から詳細な記述は見られなかったが、そうした中で、助産師という専門職に対して興味、関心を抱き、【職業選択への影響】を感じていたのではないかと考えられる。

以上のような学生の学びは、妊産婦や看護職者という役割モデルを通じた学びである。一方で、学生は、母性看護学実習の受け持ち事例が直面する「結婚」「家族形成」「出産」「育児」といったライフイベントそのものから影響を受け、自身のライフコースを思い描くという学びをしていた。モデルの存在と他者のライフイベントそのものから、学生は、将来のワーク・ライフ・バランスを考えるきっかけを得たものと考えられる。

そして将来の自分を思い描く以外にも、直近である卒業後すぐに訪れるライフイベントとして、自分自身の【職業選択への影響】も実感し、また自分の出生やこれまで受けてきた養育に対して、原家族に対する【両親への感謝】をし、生まれ来る新生児が、自分たちの人生よりもっと先の将来の社会の担い手となるという【かけがえのない生命についての学び】を得ていた。つまり、過去から近未来、さらにその先の時間空間にまでわたる、非常に長いライフコースの軌跡を描く体験をするという学びを得ていたことが明らかになった。これらのことを教員もまた周知して、教育、指導に関わっていく必要がある。

2. 母性看護学実習の展開への提案

本研究より、看護学生が母性看護学実習という体験から、多くの学生が自身のライフコースに影

響を与える学びをしていることがわかった。特に分娩を見て、出産場面に立ち会って、という記述があったように、分娩期実習を体験できた学生の記述からは、その体験が〔結婚・出産・養育をより現実的なものととらえ、計画的にライフコースを描こうとする〕事につながっており、〔母児との出会いや児の誕生による感動から自らの出産・育児への意識を高め(る)〕ていた。そして、分娩に立ち会った学生は、【かけがえのない生命についての学び】をただだけでなく、自分を産み、育ててくれた【両親への感謝】する姿勢を見出していた。他の調査¹⁶⁾でも、看護学生が分娩を見学し、生命の尊さだけでなく女性の偉大さや親への感謝の気持ちが得られたと報告されている。

しかし母性看護学実習では、必ずしも学生は分娩時の立会いができるわけではない。実際の体験ができなくとも、受け持ち事例との関係がよくとれ、その中で母親と新生児との相互作用に直面することはできる。対象である妊産褥婦と新生児・その家族との直接的な関わりから対象の気持ちや児との関係について考えることもできる¹⁷⁾。すなわち分娩に立ち会えたことだけが母性看護学実習における学びを高める必須条件でない¹⁸⁾。実習により学生に多くの体験ができるような教員の配慮は大切ではあるが、学生の体験のひとつひとつの意味づけを行うことが重要であり¹⁹⁾、本研究のような手続きによって、実習後に学生に自身のライフコースを意識させて考える時間を与えることにも教育的意義があるものと考えられる。本調査は、学生が実習の体験を振り返り、より自分の考えを明確にするきっかけになったと考えられるからである。

3. 今後の課題

看護学生は実習での人間関係の相互作用から出産観や人生観を考える機会となると捉えているとの報告²⁰⁾があるが、本研究の結果から、母性看護学実習の体験において、多くの看護学生が自らのライフコースに影響を与えると自覚していた。しかし、今回の記述からは、影響を及ぼす具体的な要因の把握にまでには至らなかった。母性看護学実習は、妊産褥婦および新生児とその家族を通して、女性のライフサイクルや母性看護の役割を学ぶ。実習の体験から、自分のライフコース

に目を向け将来の自己のイメージやキャリアを積むことに繋がること、学生は次の時代のリプロダクティブ・ヘルスの担い手であることから母性看護学実習の果たす役割は大きい。実習体験のうち、具体的にどのような要因が看護学生のライフコースに影響するのかを把握することは、学生にとってより効果的な実習を展開するために重要であり、今後さらに検討を続けたい。

また調査時期について、各学生の母性看護学実習終了直後に記述させた内容ではないことから、学生によっては母性看護学実習終了と本調査までの時間差が大きい者もあった。そのため、今後の調査においては、方法に関する検討も行う必要がある。

今回の調査では、母性看護学実習がライフコースに影響を与えたと思う、と答えた者のデータを分析した。影響を与えたと考えない学生もいたことから⁸⁾、そう答えた理由やその学生らの経験についての分析も今後は必要であろう。

さらに今回の調査では、教員や臨床のスタッフの関わりが学生にどのように影響していたかまでは把握できていない。したがって、今後は教員や臨床指導者の関わりについても検討する必要がある。

V 結 語

母性看護学実習による看護学生のライフコースに影響を与えた学びとして、【家族の存在を意識したライフコースへの願望】や【出産や育児というライフイベントに対する意識の具体化】があり、結婚、妊娠、出産という女性にとって大きなライフイベントに関連した学びがあった。その他に、学生たちは将来の自分を思い描く以外にも、直近である卒業後すぐに訪れるライフイベントとして、自分自身の【職業選択への影響】も実感し、また、母性看護学実習を通して、自らが今後その役割を遂行するかもしれない、【母親役割、女性役割への気づき】をし、原家族である【両親への感謝】によって、これまでのライフコースを振り返り、生まれてくる子どもたちのことを未来へつなげる【かけがえのない生命(についての学び)】として捉え、過去から未来へと続く、非常に長いライフコースの軌跡を描くという学びをしていた。

引用文献

- 1) 浅野賀子, 馬場真紀, 尾端博子, 他: 母性看護学実習で学生が興味や達成感を感じた出来事や場面の実態, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 7, 78-83, 2011.
- 2) 神谷美樹, 高杢裕子, 小原まゆみ, 他: 母性看護学実習において看護学生が感じる満足感・達成感の分析, 九州国立看護教育紀要, 10(1), 8-15, 2007.
- 3) 内田貴峰, 一花詩子, 稲尾公子: 看護学生の母性意識に関する調査: 母性看護概論授業開始前のアンケートと母性看護実習終了後のグループワークより, 埼玉医科大学短期大学紀要, 22, 67-72, 2011.
- 4) 近藤邦代, 小玉ひとみ, 松宮良子: 母性看護学実習で学生が捉えた母性観の様相 母性看護学実習後のレポートの分析を通して, 日本看護学会論文集: 母性看護, 43, 88-91, 2013.
- 5) 三浦真保, 穴戸路佳, 大森智美, 他: 母性看護学実習が看護学生の対児感情に与える影響, 母性衛生, 51(3), 271, 2010.
- 6) 清水尚子, 安東望美, 岸田真由紀, 他: 大学生女子の理想のライフコースと出産・子育て環境に対する意識, 京都母性衛生学会誌, 16(1), 31-36, 2008.
- 7) 井上智紀: ライフコースの多様化に伴う生活リスクの変化と保障ニーズ, 生活経済学研究, 33, 1-18, 2011.
- 8) 和田佳子, 藤井智恵美, 岸田泰子: 母性看護学実習が看護学生の描くライフコースに与える影響と看護学生による実習評価との関係—実習の満足度, 技術経験項目, 自己評価点との相関関係—, 共立女子大学看護学雑誌, 2, 10-16, 2015.
- 9) 林聡美: 母性看護学実習における社会人経験がある学生への臨地実習指導者の関わり, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録, 38, 167-174, 2013.
- 10) 井上弥: 山本多喜司監修, 発達心理学用語辞典, 北大路書房, 京都, 178-179, 1991.
- 11) 工藤美子: 女性のライフステージ各期における看護, 森恵美編, 母性看護学概論, 医学書院, 東京, 172-239, 2014.
- 12) 国立社会保障・人口問題研究所: 出生動向基本調査(結婚と出生に関する全国調査)2010年(2014年12月5日閲覧) http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/doukou14_s.asp
- 13) 都竹友季子, 出口睦雄, 野田貴代: 看護学生の母性看護学実習に対する意識調査(第7報)—母性看護学実習において看護学生が実感できる看護の魅力とは—, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 8, 37-44, 2012.
- 14) 徳田真理子, 甲斐寿美子: 母性看護学実習における学生の意識変化, 帝京平成看護短期大学紀要, 17, 21-25, 2007.
- 15) 衣川さえ子: 女子看護学生の母性看護学実習を通じての性役割の認識構造, Quality Nursing, 6(6), 505-512, 2000.
- 16) 都竹友季子, 出口睦雄, 野田貴代: 看護学生の母性看護学実習に対する意識調査(第9報)—母性看護学実習における看護技術項目の実態調査と看護学生の意欲—, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 9, 7-15, 2013.
- 17) 花田待子, 庄司さみえ, 古都昌子: 看護学生の「母性看護学実習」における学び, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要, 2, 39-49, 2007.
- 18) 井田歩美, 齊藤早苗: 母性看護学実習における学生の学びと実習目標との関連性, ヒューマンケア研究学会, 2, 36-40, 2011.
- 19) 大槻弥生: 看護学生の看護師になる自覚の芽生えに関する影響要因, 日本看護学会論文集 看護管理, 43, 67-70, 2013.
- 20) 布施明美, 本多千恵子: 母性看護学実習における看護体験と学び—実習後のアンケートより—, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 2, 48-54, 2005.